

白銀の八幡平で 風を支える生徒たち

中学世代の国内ナンバーワンをかけて、第47回全国中学校スキー大会が2月3日から4日間、市内各会場で行われました。選手たちの活躍が光る中、大会を支える地元中学生らの献身的な活動も輝きを見せました。

市内5校の中学生は、大会が始まる以前から、応援旗の製作や会場準備などで盛り上げに一役買ったほか、その日のオレンジ色のベストと赤い帽子を付けて、競技会場や式典会場などで元気の働きを見せます。大会期間中に約170人が役員として参加。コース整備や競技タイムの掲示、表彰式の介添えなどさまざまな場面で、全国から集まった選手団の前で堂々と役割を果たしました。

応援旗の製作に携わった、西根中美術部の鈴木史香さん（2年）は「各県にちなんだものを描いたり、みんなががんばって作りました。選手の皆さんに私たちの応援の気持ち

が伝わって欲しいです」と満足げな様子でした。

開会式と閉会式で、司会を務めた西根第一中の田村京花さん（2年）は「無事に終わってほっとしています。1カ月ほど前から練習して、皆さんに良く聞こえるよう、ゆっくりはつきり話すことを心掛けました」と大役を終えた後の心境を語ってくれました。

アルペン競技にコース係として参加した松尾中の木村陽君（2年）は「全国大会の雰囲気を感じることができたので、これから生かしたいです。自分も普段はアルペンスキーの選手。できれば、選手として出場したかったです」と来シーズ

ンへ向けて意欲を高めていました。

クロスカントリー競技の役員に従事した安代中の青野ゆりさん（2年）は「寒いけど、選手たちのためにがんばりました。同じ学校の生徒が、全国の舞台で活躍していて、とてもすばらしいと思います」と笑顔を見せていま



表彰状を伝達する中体連役員への介添えも生徒が務めます



競技開始前のスキーに確認シールを貼り付けます



気象係は会場の温度や風向きなどを確認



式典での司会は西根第一中の生徒が担当



開会式で元気にあいさつする受け付け係



各県選手団の応援旗は市内全中学校が製作



西根中吹奏楽部は式典で10曲以上を披露しました



アルペン会場で、選手が滑りやすいようコース整備に当たる生徒たち



選手がゴールした後は、速やかにタイムを掲示します



クロスカントリーコースの状態を確認する前走者



スペシャルジャンプ

全国中学校スキー大会では、第32回大会で畠山拓浩選手(田山中)が県勢唯一の優勝。遠藤秀治選手(清光社・松尾中出)が国内外の大会で大活躍しています。

北欧を中心に盛んなスキー競技で、空中をより美しく、より遠くまで飛ぶことを競うもので、純飛躍とも呼ばれます。スモールヒル(20〜49m)、ミディアムヒル(50〜84m)、ノーマルヒル(85〜109m)、ラージヒル(110m以上)、フライングヒル(185m以上)の5種類に区分。市には、田山スキー場にスモールヒル(K点20m)、ミディアムヒル(K点55m)、ノーマルヒル(K点80m)のジャンプ台があり、今回の大会はミディアムヒルで競技が行われました。飛距離の基準となるK点を60点として、1m当たりの点数を増減。5人の飛型審判員が20点満点で採点したもののうち、最高点と最低点を除いた3人の得点の合計を競います。

スペシャルジャンプ



田山ジャンプ

この大会は、アルペンやクロスカントリイは男女別で競技が行われますが、スペシャルジャンプ競技のみ男女の区別なく行われます。市からは小林諭果選手(松尾中3年)が県勢唯一の女子選手として出場しました。



コンバインド・後半距離

コンバインドは、ジャンプとクロスカントリイの2種目を合わせて行うことから、ノルディック複合競技とも呼ばれます。瞬発力と持久力が求められることから、欧州ではこの競技の優勝者を「キング・オブ・スキー」(スキーの王様)と呼んで称えます。

コンバインド

この大会で行われたグンダーセン方式では、前半種目としてまずジャンプを1本飛びます。スペシャルジャンプと同じ採点方法で得点を付け、1点を4秒に換算します。後半種目のクロスカントリイで、得点トップの選手から順番に、得点に応じたタイム差でスタート。この後半クロスカントリイでゴールした順位で総合成績が決まるため、ゴール寸前まで壮絶な争いが期待されます。

後半距離は中学生が5km、高校以上では10kmで実施。全国規模の大会になると、後半距離が短いスプリント種目や、前半にクロスカントリイを行った後にジャンプを飛ぶ、マススタート種目が行われることもあります。

コンバインドは八幡平市のお家芸。アルビールビル冬季五輪団体金メダリストの三ヶ田礼一選手をはじめとして、世界ジュニア選手権で優勝に輝いた小林潤志郎選手(盛岡中央高校3年・松尾中出)、ユニバーシアード団体で金メダルに輝いた永井健弘選手(天山リゾート・田山中出)、畠山長太選手(早稲田大学・安代中出)、全日本選手権二連覇の永井秀昭選手(岐阜日野自動車・田山中出)など、日本を代表する選手を数多く擁しています。



コンバインド・前半飛躍

全国中学校スキー大会においても、第36回大会で永井秀昭選手が、第38回大会で小林巧選手(安代中)が、第40回大会で畠山長太選手がそれぞれ優勝しています。

スキー競技の基礎知識

全国に名だたる選手を多数擁するスキー王国八幡平市。このページでは、なかなか目にすることのできない競技のポイントを紹介します。

アルペン

斜面に突き立てた旗門の間を滑る速さを競う競技です。今回の大会では、スラローム(回転)種目とジャイアントスラローム(大回転)種目が行われました。スラロームは、細かくセッティングした旗門の間を滑る種目で、卓越したターンの技術が要求されます。ジャイアントスラロームは、コース全体に大きくセッティングされた旗門を高速で滑る種目。スピードを落とさずに確実に滑る高い技術と精神力が求められます。



ジャイアントスラローム



スラローム

市出身選手では、小船勝巳選手(東海大学)や新里尚子選手(平館高校3年)が、全国大会などで活躍しています。

クロスカントリイ

スペシャルジャンプ、コンバインドとともにノルディック競技と総称されます。クロスカントリイは、クラシカル、フリーと走法ごとに種目が分かれ、大会では男女ともに2種目が行われました。クラシカル種目は、後ろに滑らないようにしたスキーを平行に保ちながら、交互に前後させて進みます。フリー種目は、スケートのように、スキー板を逆ハの字形に開いて進むスケーティングを行うため、スピードが出る種目です。



フリー



クラシカル

いずれの種目も、持久力とテクニク、起伏に富んだコースの攻略や気象状況に応じたワックスの選択など、総合的な戦略も鍵になります。



開会式で「感謝の気持ちを忘れず、可能性を持つ仲間と戦えることを喜び、白銀の世界に夢と軌跡を描きます」と選手宣誓をする小林選手



地元の声援を受け 全国に力を見せる



ゴール直後の選手に元気な声援を送る田山保育所の園児

県選手団主将として、選手宣誓も務めた、スペシャルジャンプ競技の小林諭果選手（松尾中3年）は「選手宣誓で述べたとおり、感謝の気持ちと忘れずに飛ぶことができたと思います。競技以外にも役員として大会運営に関わることで、他の選手の応援もがんばりました」と晴れやかに話していました。



男子リレー5位入賞の立役者となった川野創平選手⑥

「燃える闘志 輝く笑顔 白銀の八幡平で風になれ」。西根中2年の阿部隼斗君が考えた大会スローガンのもと、第47回全国中学校スキー大会は2月3日から6日までの4日間、市内3会場で行われました。42都道府県から約1400人の選手・役員が参加。生徒役員のがんばりや応援もあり、県勢は大躍進。近年にない、多数の入賞に輝きました。アルペン競技では、斉藤優選手（松尾中3年）が男子スラローム競技で8位となり、アルペンでは県勢唯一となる入賞を果たしました。クロスカントリー競技において、県大会2冠を達成した

な笑顔で、中学生生活最後の全中を振り返りました。全国中学校スキー大会岩手県実行委員会会長の工藤保県中体連会長は「式典では、元気なあいさつや素晴らしい音楽、競技会場では役員として働いてくれた、地元の生徒たちの働きに大変感動しました。おかげで県勢は、過去にないほどの入賞を果たすことができました。選手たちも、自分たちの実力に自身を持つことができ、来シーズンの地元開催インターハイなど、次につながる収穫があったと思います」と大会を総括しました。また、大会期間中は、地元スポーツ少年団に所属する小学生なども前走者として参加し、全国の高いレベルのレースを見学。クロスカントリー競技会場には田山保育所の園児たちも応援に駆け付け、選手たちに盛んに声援を送っていました。

「大きくなったならスキー選手になりたい」と目を輝かせながら大舞台を見つめる子どもたち。次の三ヶ田礼一選手は、こうした子どもたちの中にいるのでしょうか。八幡平市では、来季スキーインターハイの開催が予定されています。

川野創平選手（安代中3年）が得意の男子クラシカル種目で8位入賞。県勢としては8年ぶりとなる入賞です。また、最終日のリレー種目に、県チームの第2走者として出場。第3走者に2位でつなぎ、県勢5位入賞の原動力となりました。また、大会の「顔」として、ご当地ヒーロー・岩鷲護神ハチマンタイラーも応援。選手のゼッケンや役員の帽子などにそれぞれの競技をする姿がキャラクターとして描かれました。開会式にはハチマンタイラーも掛け付け、選手と握手や写真撮影を行い、激励していました。

